

菖蒲は最後のメッセージ

柴山 仁美 茨城県筑西市 五十二歳

母が亡くなった。突然に。心筋梗塞だった。

あまりにも突然過ぎて、訃報を聞き訪ねてきた母の友人達はみんな驚き口々に「何故」を繰り返した。それは私も神様に聞きたい。何故母なの？何故こんな急に？

山歩きが趣味で山野草を見るのも育てるのも好きな人。自営業の商売が忙しかったけど、休みの日にはハイキングに行き、花の名前を教えられてくれたよね。

学校を卒業と同時に嫁に行き実家を離れたけど、いつも励ましてくれる味方だった。「我慢しなさい。でも、本当に無理なら帰ってきなさい。」そう言われると、まだ大丈夫だな。帰る場所あるし。なんて安心できた。

もうこれから、本当に無理なことがあっても、わたし帰る場所が無くなっちゃったよ。

最後の顔が穏やかで、化粧をしてもらった姿を見て、驚いたの。今まで気が付かなかったけど、整った顔立ちしてたのね。「お母さんに顔が似てるね」と言われるたび、複雑だったけど、今後は嬉しいと思う。

茶毘にふされてお骨になった時、一部分鮮やかな紫色に染まった骨を見て、涙が止まらなくなった。たくさんの友人が花をたむけてくれたけど、父が庭で育てた菖蒲の花束を顔の横に、そっと置きながら「お前が育てた花だ」と最後に添えたのが、骨に色移りしたのが分かったから。

一番居心地の良い自分の家で育てた花を、一番大好きな父に贈られた証を残したんじゃないかな。案外ロマンチストなところあるから。母からの最後のメッセージだったのかな。